

宮代家由緒書

神奈川県郷土史・平塚市郷土史より抜粋

一、起源と系譜

宮代家は古くより相模国に根を下ろし、代々地域の発展と皇室への奉仕を旨としてきた家柄である。江戸期より続く家系は、今日に至るまで十六代を数える。歴代の当主は、地域社会の重責を担い、神社への奉納、公共事業への尽力などを通じて、その名を後世に伝えている。

二、近代における事績

特に顕著な事績を残したのは、十二代・宮代甚七（1853-1924）である。甚七は相模川の砂利採取事業に従事し、鉄道敷設や土木工事に必要な資材を供給した。その最盛期には一日百八十九車を出荷した記録があり、地域の近代化に大きな貢献を果たした。また、大正十三年には国道一号線（東海道）馬入橋の工事を宮代家が請け負い、さらに平塚八幡神社へ花岡岩の鳥居を寄進するなど、宗教・社会両面において篤志を示している。

甚七は「小事にとらわれぬ楽天家」と評され、地域の人々から敬愛を集めた人物である。平塚新宿の八幡神社に残る石鳥居、馬入連光寺墓地に所在する墓碑は、今なお宮代家の歴史を物語っている。

宮代次郎左衛門幸吉 (1806~1874)

旗郡に、村住共て、岡大とし。は門際る吉衛にあ幸左施が門文実。家衛田のる。代左宮暦い宮郎、新てに次門のし家代衛期集主宮左新編名、兵維をの主田末暦) 名宮幕家市の主け農塚期名受た平後) をい(戸市導づ村江塚指基入の平のに馬所(徳宮郡行村尊經住知目宮業大本金二農

宮代甚七 (1853~1924)

學を)砂こ用に
 を託す。達を蔵
 塚管委ラたにた線平
 (平經のバツ人ん込男
 業府(な百及引次
 村農政利と八も下を
 入きり砂初高に主業
 馬継よの最最車路家
 郡を)用の日九線)
 住家年路取一十道年
 大。九線採は八鉄八
 年。十道利人百道正
 二れ治鉄砂用、海大
 永主明道る使西東(嘉
 生(海け。十一年
 者に年東おた五上九
 業男六てにめ百畔一
 集次八い間納二入九
 採の八お民に車馬一
 利家一に、府貨は。
 砂代、川の政は利た
 の宮が入じて量砂し
 期家た馬はべ取の送居
 正名い、をす採量輸隱
 大)下け取は、大てり
 明市ん受採利し、のい讓

宮代平蔵 (1884~1953)

大主 事入平景四一
日生継め馬のも（～
六にを広、町後員九
七月男後を員馬行議四
七次、路議須施会九
年のり販会、制議一
七七よに町り市市（
十甚に際馬な。塚）
治代居の須とた平年
（明宮隱災、）七
年、の震役年力年三
四業父大締八尽六九
八取）東取二に三一
八採年閑行九等九（
一利八や銀一行一を。
砂正え陽（施（長た。
議。大換江員市）議め
景市（切方議の年会勤
議、塚年の一会町二議度
市（平九へ。景塚三市三
塚（一、道た、平九、下
平村九鉄し取、一うま
の入一便大頭併（な）
期馬。輕松団合員と一
和郡る。を防町議）五
昭住れど業消塚会期九



宮代甚七



マ ツ
昭和十五年十一月十一日没

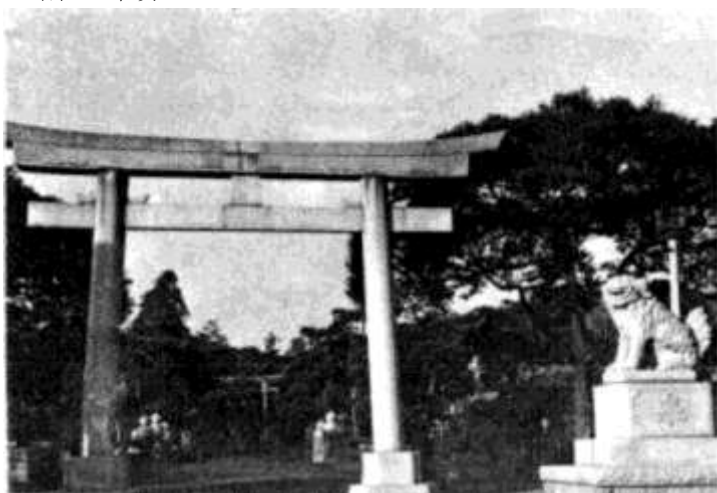


甚 七
大正十三年二月二日没

◇宮代甚七

明治20年(1887)7月、平塚駅開業前から、鉄道沿線に用いるため相模川の砂利採取に従事し、大きな成績をあげたのが宮代甚七(1853-1924)で、当時最盛期には、1日189車を出荷した記録があります。

八幡神社石鳥居
昭和10年頃



宮代甚七

小事にとらわれぬ楽道家であったといえます。平塚新宿に鎮座する八幡神社へ、妻マツと神職雲出清太郎とともに花岡岩の鳥居を寄進しています。



宮代甚七の墓
馬入連光寺墓地。

三、皇室との関わり

宮代家は古くより皇室との関わりを持ち、昭和期においてもその交流の痕跡が確認される。昭和天皇の御代には、宮代家とゆかりの品や史料が残されており、郷土史の中でも皇室との縁故が語り継がれている。





皇室御来訪当時の新聞記事

德和昌 西區城隍廟下南分殿因（前）左邊

將官候補生大學の學生約四十名は馬込八十號と共に來月四日から一週間の學定で平塚市及び中郡下の相模平野を中心に學生演習を行ふが、恰も同校二年生に樹立候補はされる竹田富樹、徳大財宣等下とも同校卒業して演習に樹立候補はされ、前年野平市を中心とする五、六、七三日間の演習には、男入道代平義正等へ關係招致はされる事になり、同家では繼に野平郡下の郷土内定した。

光榮の宮代氏

目下警志野騎兵聯隊に一將校として御勤務中にあらせられる賀陽中佐宮恒恵王殿下には来る廿二日から同聯隊の中郡下における演習に御参加遊ばされる爲め十二日並びに廿二日の兩夜、平塚市馬入二六七八朝幡驛宮代平藤氏宅に御宿舎を取らせられる事になり、此の旨通達があつたので同家では光榮に感激、奉迎の準備を進めてゐる。

陸大現地演習



三日御來平

平塚市奉迎陣

竹田大尉宮恒重子殿下には来る四日から平塚、厚木方面を中心に、中郡相模平野で進行される陸軍大學々生四十名の現地視察演習に御参加遊ばされるため四日午前十時卅三分平塚驛着列車で御来平、馬入宮代平藤氏に四、五、六の三日間御滞在遊ばされる事になつたので

宮下御清在の光榮に浴した地元では四日御米着の慶勝朝に橋本平塚市長代理助役以下各名譽職員、各官公署代表らが御出迎へ申上げ市内各小學校では上級生が御前廣場に堵列恭迎申上げる事になつた。

宮代平藏氏

平塚町馬入二六七八



紫電一閃觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る夏
向寒き銘刀虎
徹の如き切れ
味を有し縣下
の政治界に將
又實業界に縱
横無碍に快腕

を揮ふ偉材と言へば何人も宮代平藏氏を擧ぐるに躊躇せざるべし氏は宮代甚七氏の次男として明治十七年七月六日現住地に呱呱の聲を擧ぐ家は代々砂利採取を業とせるを以て氏も亦父祖の遺業を繼ぐと雖も機を觀るに敏なる鬼智と神算一度びならば猛然として之れを斷行するの勇氣は愈々良好の業績を收め得て進展又進展殆んど靜止する處を知らず爲めに昭和

四年十一月昭和砂利工業株式會社を創立し自から社長として之れに君臨し傍ら平塚町江陽銀行の取締役を兼ね縣下財界に確固不拔の勢力を占む氏は愛郷心に燃ゆる熱の人にして事苟くも郷黨の爲め町の爲めとし云へば勞資を吝まらず特に公共的施設に對して意を用ゐる處多く町會議員として從來捐出したる義舉少しとせず又馬入消防組頭として昭和四年三月迄勤績し其功績顯なるもあり爲めに縣警察部長より表彰さる之れ同町に於ける氏の德望信頼勢力の遍き所以にして現に町相談役に推され民政縣支部にあつても幹事の要職に擧げられ黨務の樞機に參じて黨員間に重きを爲す現在縣會議員たる他赤十字社支部幹事の公職にあり同社特別社員として多年有功章佩用者たり夫人うく子氏（四四歳）は名實共に氏の女房役たるに相應しき賢婦人にして長男甚三氏（明治大學在學中）三男三郎氏（藤澤中學在學中）四男勇氏（同上）の四兒も嚴父の血を享けて秀才を以て學友間に著はる。

市制5周年までの動き 昭和8年～12年(1933～37)



平塚市役所庁舎 昭和2年(1927) 鉄筋コンクリート造
2階建ての町役場を新築。7年に市役所庁舎となる。



2代市長 馬場義也
昭和8年8月～
10年8月。



2代議長 杉山昌夫
昭和11年5月～
12年12月。
のち4代・5代
(15・5～22・4)



3代議長 宮代平蔵
昭和12年12月～
15年5月。
のち8代・9代
(24・4～25・4)

◇ 新生都市の計画

県下の中核都市を目指し出発した平塚市は、商工都市として郊外住宅都市として「明るく住みよい平塚市」をモットーにして、将来計画を立案した。その主なものを挙げると、住宅地区設定に伴う下水網の完備、馬入川の改修と須賀島港の修築、工場地帯の設定、急行列車の停車、省線電車の延長、官公庁の平塚移転、大山または栗野～平塚間の電車運行などである。



第1回関東市会議長会

昭和10年(1935)5月13日午前10時から開会された。関東1府7県20市会議長会は、平塚市高等学校講堂で舉行された。会議は会則制定と提出2案件を審議した。

主 な で き ご と

一、國有鐵道列車、
運轉ハ東海道線
横濱驛迄トス
二、東京市内ハ自動
車運轉停止
昭和十一年二月三日
平塚市役所

東京日日新聞
今晩二時半遂に
帝都に成嚴令布告
司令官は香椎中將
昨六日東京中における軍民衝突の騒動に成嚴令を
発することになり、今日午後一時、帝都に成嚴令を
布告せられた。本報は、帝都に成嚴令を布告する
頃、成嚴令の内容は九段入會館である。成嚴令は、
九段入會館に於ける、
全閣員の辭表を捧呈
後藤首相代理に御説
明を仰せられた。成嚴令は、
帝都地方共に
帝都地方共に

平塚駅に掲示された告示

昭和11年2月26日に起きた陸軍の
一部軍人による叛乱事件(2・26事
件)は、市民を驚かせ一様に不安
の念に襲われた。

復興祭と平塚競輪場 昭和25年（1950）

平塚復興祭



平塚駅前広場に建てられた祝賀塔



見附台公園広場会場風景

仮設の演芸場では、連日芸能人や地元有志による演芸が披露され、山車やパレードも繰り込んだ。

◇平塚復興祭

昭和25年7月5・6・7の3日間、平塚復興祭が行われた。終戦から5年間、耐乏生活を経てきた戦災市民に一時復興の目標がたったので、一層楽しみを与えようというのが狙いだった。短期的にも農繁期も過ぎ7月のお盆前でもあったので、この3日間は大出で賑わった。見附台公園で、仮設演芸場における式典と演芸・サーカス・酒類販売組合の清酒サービス等。そのほか市内各地で催しものがあった。これが契機となり翌年から七夕祭が始まったのである。



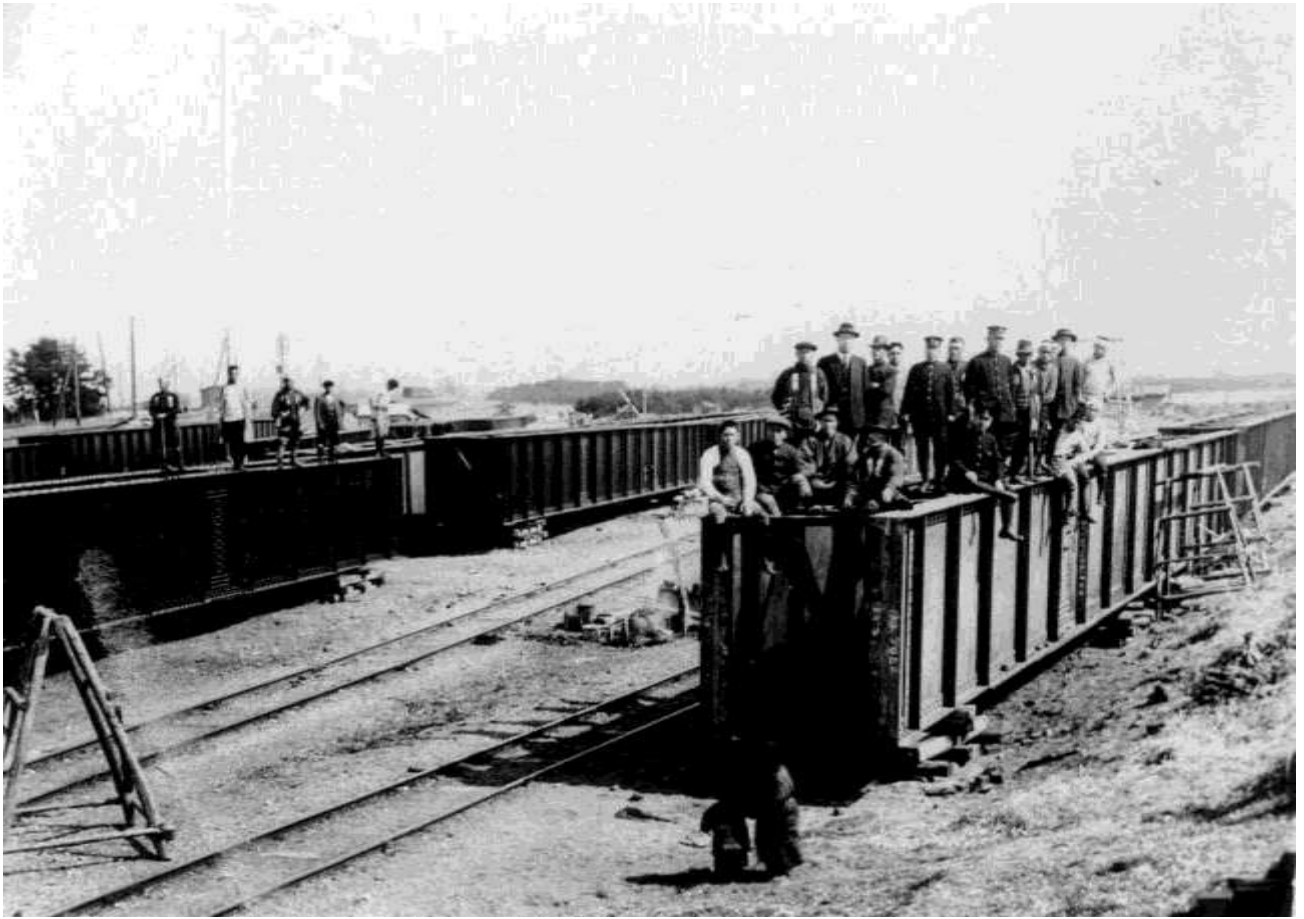
平塚復興まつり式典参加者記念撮影

見附台公園入口で撮影。中央が地元選出の当時衆議院議員の河野謙三議員。



サーカスの大テント

見附台公園内で興行した曲馬王国大サーカス団は、戦前平塚新宿・恵比寿の森広場で興行されたサーカスより大規模なもので、空中ブランコ・曲馬・象やライオンの曲芸は当時の少年少女の夢を大きく抱えました。



大正12年 中央の着物姿 創立者 宮代甚七



大正13年 国道1号線(東海道)馬入橋工事 宮代家が請負う



大正14年 仕事始め 中央モーニング姿 宮代平蔵
中央下 子供は13代目達

四、十四代

十四代の一人である宮代知直は、祖先の業績を受け継ぎつつ、時代の変遷に応じて新たな責務を果たした人物である。知直たち十四代においても、地域社会との結びつきが強化され、宮代家の存在は平塚・相模地方の歴史の中で確固たる地位を築いていった。

五、現代-十六代へ

現在、宮代家は十六代を数え、その系譜は連綿として続いている。長きにわたり地域の発展に尽くし、皇室との関わりを保ってきた宮代家の歴史は、単なる家族の記録にとどまらず、地域社会・国家の歴史の一部として重んじられるべきものである。